



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第四十三号

2024/4/30 発行

題字：高橋弘美

最近走っている。二日か三日に一度、四キロほど走っている。姿勢やフォームの悪さ、体重などの問題が重なって股関節が痛むので、いろいろと見直しを迫られてはいるが、それもまた面白く興味深い経験であったりする。運動しなければ体を痛めたり怪我をしたりすることもなく過ごせるのだが、そして体にとっては間違いなくそのほうが平穏無事な生活であるはずだが、体が平穏無事な環境で過ごすことを前提としているとは、このごろあまり思えなくなった。

しばらく前に免疫に関する本を読み、アレルギーは衛生的な環境に置かれると発生する病気であることを知った。人の体は雑菌やウィルスとの絶え間ない戦いを前提として作られており、適度に不衛生なところにいないと、自身の戦闘力を持てあまして、炎症を起こす物質を過剰に作ってしまうらしい。これがアレルギーの原因のひとつだそうだが、怪我にも同じことが言えるのではないか。体はもっと、さまざまな試みを受けることを欲しているのではないか。そこからみごと復活してみせるところに、体の面目躍如たるものがあるのではないか。

今号の内容

声の主

声の主

それにしても、わたしのように三十年以上運動嫌いとして生きてきた人間が、突如として日常的に走ったりするようになるのだから、ほんとうにわからないものである。

物心ついたときから体を動かすのが苦手だった。外遊びは別に嫌いではなかったが、わたしの場合外遊びというのは、ぼうつと用水路の流れっていくのを眺めたり、カエルの跳びはねているのを追っかけたり、アリの行軍を見守ったりというような、おそろしく能動性に欠けたものばかりで、およそ自分の体を使って世界におち当たっていかうというような気概とは無縁のものばかりだった。自分もまた跳んだりはねたり走ったりして楽しむような遊びがあるとは、保育園に入るまで、わたしは夢にも思わなかったものである。わたしにとって、世界は勝手に動いているものであり、それを見るものであった。そこに自分が自分の体とともに参入するような性質のものであるとは、少しも気がつかなかった。

幼少期の最初の数年を、ごくおとなしく、運動らしい運動と無縁で過ごした子どもと、本能的に体を動かすことの楽しみを知っており、それを実行してきた子どもとのあいだに、身体能力や運動センスといったものに関してずいぶんな差が生じるのは想像に難くない。わたしが自分の体というものにまともな気がついたのは保育園に行くようになってからだが、正直なところ、それはどちらかという不幸な経験であった。自分の体というものにわたしは混乱した。自分が見ているものを自分もやらなければならぬらしいということ、それが要求されているらしいということに、わたしはまずつまづいたのである。

こんなことを書くと、なにかひどく高尚な話と思う方がいるかもしれないが、そういうことではなくて、子どもながらに幾ばくか芽生えている自我意識が、体というもの存在をまったく考えもしなければ認識することもないというようなことは、そう珍しいことでもないのではないかと思う。珍しいとすれば、そのことを何十年も覚えていて、記述しなければすまないと思うような人間があまりいないというだけのことではなからうか。

が、ともかくも、こういう消極的な、物理的な自己存在というものになにか生まれながらに不信を抱いているような人間が、運動というものの中へ否応なしに巻きこまれてゆくと、どういうこと

が起こるかは目に見えている。この者の運動機能は著しく劣等であるから、保育園や学校という社会の縮図の中で、そのことを痛烈に自覚するのである。

運動嫌いを自認している人間の多くが、実は運動が嫌いなのではなくて体育の授業が嫌いだけであって、健康的な生活習慣としての運動と、体育の授業とはまるで別物だという趣旨の記事を以前読んだことがある。そのとき妙に納得したものが、わたしの場合にも、運動が嫌いだというのは、確かに体育の授業ならびに学校における運動が嫌いだということから来ているのである。

なぜ学校という場があんなに軍隊じみているのかは、わたしには永遠の謎であるが、学校の運動というのもまったく義務教育の名にふさわしく、義務的で強制的なものだったように思われる。運動と勉強とは、能力の優劣があらさまに可視化されてしまうという点でずいぶん乱暴なものだが、しかし勉強がだめなら運動があるというような、学校生活にほとんどこの二択しか存在しないところに、子ども心になにか致命的なものを感じていた。しかも両者ともに大まかな方向性があらかじめ決められているというところがまた致命的で、その方向性に乗っかっていかない頭脳や乗っかっていかない体を持ちあわせた場合、学校生活というものが途端にすこぶる難儀になってしまうとこ

ろも、なにかおそろしく致命的なのである。

この致命的なうえにも致命的なものの致命傷であるところにみごと落ちこんでしまうのが実にわたらししいのだが、ともかく学校で運動させられるたびに、わたしは自身の運動機能の劣悪なことをいやというほど自覚させられた。なかでもとりわけひどかったのが運動会というやつだった。小学校のころ、わたしは全校生徒のなかでもっとも足の遅い者として通っていて、実際わたしの走るのには歩くのよりも遅かった。長距離走となると、足の速い生徒はわたしを二周も追い抜いて、全校生徒がとくにゴールしてもわたしはまだもう一周残っているというようなありさまだった。

このような状況に置かれると、真面目な生徒などは、どうかしなかなければならないと思って努力したりするのもかもしれない。ところがわたしはそうでなかった。運動などという乱暴な、礼儀知らずのよそ者など大嫌いだったので、そんなもののために努力してやるつもりなど少しもなかった。むしろ憎しみのあまり、その運動というやつがわたしの手にかかるとうかにも出来損ないに成り下がるか人を人に見せつけてやりたいというような屈折した心理まで働いて、もうなるたけ足を遅くして、人の気をもませ、悪くすればわたしひとりのために昼食の時間が遅れたり、進行に支障が出たりするようにと計らったものである。

だが悪いのはわたしではない。わたしに運動など強制するような世界が悪いのである。

この手の力の行使はしかし、愉快なものである。ここにひとりの、太っていて足の遅い生徒がいる。この生徒の足を速くすることは、誰にもできなかった。運動の得意な生徒も先生も、フルマラソンの選手をしていたという生徒の保護者がつきつきりで特訓してやっても、この生徒は足が速くなるどころか、なぜかやるたびごとに鈍足になってゆくのである。おまけにこの生徒は絶望的な運動音痴で、身体感覚というものがまるで養われておらず、少し難しいことを言われると、そのたびに立ち止まって首をかき上げてしまうのである。そんな調子だったので、しまいに皆さじを投げてしまった。あいつはどうしようもない、というのが皆の共通認識になり、仕方がないからあいつがゴールするまでじりじりしながら待っているよりほかないという状況を作り出すことに、わたしはみごと成功したのである。

わたしの存在が、運動会においてどれほど人をいらいらさせたかは、いまでは確認のしようがない。わたしの伝説的な足の遅さが、どれほど他の生徒たちの笑いものになったかも、いまでは確認のしようがない。妙な話だが、走っているあいだ、わたしは周囲の反応など見ていなかった。確かに

わたしは自分の足の遅さのために、全体の足を引っぱることを楽しんだ。運動会という祭りの場にとって、わたしは一種の場違いな災いであった。そしてその場違いな災いは、周回遅れで走るあいだじゆう、なにかやたらめったらな憎悪というものにとり憑かれて、あらゆるものを呪っていた。そのときわたしの頭の中では、ひとりの憎しみに満ちた人間が、絶えざる呪詛の言葉を吐いていたのである。

呪え、呪え、日のもとにあるすべてを呪え。くだらない人間どもを呪え。運動を呪い、自身の存在を呪え。生まれてきたことを呪え。この世界のありさまを呪え。呪え、呪え、すべてを呪え。

日はいまや正午に近づき、わたしの頭上高く輝いている。もう十二時を知らせる鐘が鳴った。みんなが待ちわびていた昼食の時間である。各家庭で、朝早くから女たちが心をこめてこしらえた豪華な弁当の蓋を開けて、歓声を上げるはずの時間である。だがあいにくわたしはまだ走っている。くだらない平等主義のおかげで、みんなわたしのゴールを待つよりほかない。おまえのようなやつはもういいといってわたしを止めることも、グラウンド一周分免除してやることも、連中にはできないのだ。なぜとって、それをやると平等ではなくなるからである。これは愉快なことではないか、妙なことはないか。このルールを決めたの

はわたしではなくおまえたちである。だからせいぜいイライラし、気をもむがいい。理解不能な劣等を前にして腹を立てるがいい。そしておまえたちの理屈によってすべての人間を平等に扱おうとするとき、なにが起きるかを知りたいのだ。

グラウンドを周回しながら、わたしはほくそ笑み、楽しむと同時に憎み、呪っていた。グラウンドをとり囲むように張られたテントの中にいる人々がどういふ反応を示しているかなど、実際のところどうでもよかった。わたしは憎み、楽しんでた。憎むべきルールを作った連中が、自分で作ったルールによって自分の首を絞めているさまを思い描き、ざまあみろ、みんなくたばればいいのだと思っていた。こんな力の使い道のあることを、連中は夢にも知るまい。

そして人様に遅れること二周近く、わたしがゴールせんとするその瞬間、トップの生徒によってとつくの昔に切られていたゴールテープが再びピンと張られるのである。係の生徒や先生がゴール前で手を振って、わたしがテープを切るのを待っている。ここへ来るとわたしの憎しみは頂点に達して、もう息も絶え絶えで進むこともできないという演技までして、ことさらにゴールを遅らせ、人々の気をもませた。皆が声を上げてわたしがゴールするのを待っている。ゴールの前に、誰の指示か知らないが、同学年の生徒たちが集まっ

てきて、わたしを励まし、応援している。だがわたしにはそれが浅かな平等主義に毒された、なんとも平和で馬鹿げた教師の頭から出た差し金に過ぎないことがわかっていたし、このゴールテープも敬意の象徴というより欺瞞の象徴であることがわかっていた。わたしは連中の笑い顔や、いかにも偽善的な顔をしてわたしに手を振る同級生のその仕草や、連中の中にある、否学校というものを覆い社会全体を覆っている、劣等なものを応援し慈悲をかけてやることは正義であるというような自己満足の臭いを感じとり、ああこれはまったくたまらない臭いだなどと思ったものである。

憎め、憎め、とわたしのなかで誰かが言う。あいつらを許すな。あいつらのようになるな。おまえだけは真実で、正直で賢くあれ。剃刀のように鋭くあれ。決してあいつらのようになるな。この憎しみを忘れるな。これは祭りなのだ。われわれの憎しみの祭りなのだ。ほらテープが切れた、バカな教頭が余興にピストルをぶっ放したぞ。あいつはあれで敬意を示していると思っているのだ。だがその敬意の裏にどれほどの軽蔑があるかを忘れるな。体と目に見えるものをしか信じないあいつらを信じるな。今日のこの迫害を忘れるな。決して忘れず、決して許すな。

ところでわたしはこの声の主が誰なのか知らない

かったが、その人を慕っていた。わたしはその人が好きであった。というのも、その人はわたしの知る中でもっとも頼もしい人であったし、もっとも力強い人であり、もっとも確信に満ちた人だったからである。その人の声は恐ろしいが魅力的だった。その人はわたしに永遠の憎悪や尽きることのない怒りとも呼ぶべき力を与え、それは確かにわたしの中でひとつの強大な力になった。

ここにひとりの、おそろしく冷笑的で斜に構えた若者がいるとする。もしもこの若者にそれなりの知性と狡猾さがあれば、この若者は自身の冷酷な性質をあえて表には出さず、周囲を欺き、うまいこと世の中に適応したように見せかける道を選ぶだろう。正面切って戦うようなバカなことは、この若者は決してしない。そんな労力に値する何ものも、この世にはないからである。そして心の中でひとりひそかにほくそ笑み、あらゆるものを軽蔑し見下して満足しているのだが、これはこの若者にとって、非常に矛盾した結末を招く。

というのも、この若者は結局のところ劣等感に支配されているために、その冷たく攻撃的な考えとは裏腹に、心の奥深くに、社会に受け入れられないという強い願望を抱いているのである。そしてその密かな願望のために、この若者自身、いつの間にか自分は社会に適応したと思ひこむようになるのだ。その偽りの事実には有頂天になった瞬間

から、若者は自身の中の、あの憎悪の声を主としてに忘れはじめるといふより、この展開をいながら見越していた憎悪の声の主は、若者がこうなってしまうと、ひとつ特大のにやにや笑いを浮かべて、もうその奥深くへもぐりこんで出てこなくなるのである。

こうしてうわべは順当に社会に適応した、中途半端な者ができあがる。おそらく劣等感に悩む知的な人物の多くが、この状態で長く過ごすことになるに違いない。それでは憎悪の声の主とは、実は若者を社会に適応させるためにあえて憎まれ役を引き受けてやるというような、そういう涙ぐましい役どころだったのだろうか。彼の憎悪なるものは、その程度のものだったのだろうか。

もちろんそうではない。貴様の心などお見通しさ、と声の主は思っているのである。あわれなやつめ、なんだかんだ言ったって、あいつは憎んでいるものに愛されたがっているんだ。人に認められたい、自分もなにがしかの者だと証明したい、受け入れられたい。こういう連中は、人と違うことに寄りかかりながら、人と同じになりたがる。憎しみと怒りに燃えながら、怯懦の嵐に吹かれています。ああ、弱き者よ、あまりに弱き者よ！ 掃いて捨てるほどいるこの手の連中が、永久にその段階を超えられないことは、おれにはわかりすぎるほどにわかっている。こういう連中には、しょ

せんみずからを苦しめ辱める人間という存在を捨て去ることも、それを意にかけないほどに強くなることもできはしない。ああ、あわれな者よ、弱き者よ！ せいぜい生涯迷いの中で、偽りの順応を享受するがいいさ。だがしかし、ああ、なんとこの半端者ばかりだろう、この世界というところは！ 誰か真におれの心がわかり、おれに共鳴し、おれと行動を共にしようというようなやつはいないものか。そういう人間は、万にひとりもないのだ。あわれな者たちよ、あわれな世界よ！

わたしは先日、この声の主に久々に再会した。偶然そうなったのであるが、走ることを通じて出会ったこの主には、やはり走ることを通じてしか、ふたたび巡り会えなかつたものと見える。

元氣だつたかね、と声の主は言った。彼はにやにや笑っていた。「ともかくも、またおれを見つけたことについては褒めてやろう。普通、おれは人にたやすく見つかりはしないのだがね。特に、きみのようにある程度齢を重ねた者にはだ」

彼の話し方は落ちついていて懇篤だったが、その態度は、あらゆるものへの底知れぬ侮蔑からくる愉悦とでもいうような、なにか倒錯的な、しかしそれゆえに魅力的な気配に満ちていた。

「若いころは、多くの者が一度はおれのとりこに

なる。ならない者もいるが、それは単に間抜けなだけだ。底抜けの間抜けだけが、おれの指のあいだをすり抜けてゆくが、多くの者は捕まる……おれが捕まえているんじゃない、向こうのほうで勝手に来るのさ。そして勝手に去ってゆく。おれはそいつの中に、知り合いになれた記念にひとつの爆弾をしかけておくんだがね。これを爆発させられるやつは、正直なところ千人にひとりもないね。だがときどきは、爆発どころか盛大に打ち上げて吹っ飛ばすようなのがある。こういうやつがいると、おれはうれしいね。人間にも少しは骨のあるやつがいるのだと思つてね」

わたしなどは永久にその骨のあるやつ側に回れないだろうと言つと、声の主はにやにや笑つた。「いやいやどうして、きみもなかなか見込みはあつたんだ。だが悲しいかな、きみは臆病すぎた。多くの人間は、それをきみの良識と見るだろう。だがきみは良識とはなにかをわかっているはずだからね。それは弱さだとね……良識とは一種の防衛本能の変種にすぎんよ。人間社会に合わせて非常に複雑化され、体系化された防衛本能だ……きみはそれを見抜いた、ここまでは見込みがあつたんだ。だが問題はそれとだ。この本能を軽蔑し超越する、そこまで行ければいいものだったんだが。悲しいかな、そうした超越へ向かう者は少ない……超越へ向かわんとする者のすべてが、

それを踏み越え、乗り越え、神などという者とその掟とを乗り越えて、あらゆる理法を越えて、その彼方に広がる自由を得たいと切に願うならば：…そのときにこそ、この世界は乗り越えられたことになるというのがわからないかね。それこそが、かの寂滅の境地だと気がつかないかね。そんなはずはないんだが」

わたしはなんとなくそんな気もしていたと言った。だがわたしのなかに、そこへ向かうことを押しとどめる強烈な力が働いているのだと、わたしはその力のことを無視することもできないし、その制止を振りきることもできない、わたしは自分でも意外なことながら、非常にあからさまに生命の光の側に身を置いておくことを意識せざるを得ないと言った。

憎悪の声の主は、ふむと鼻を鳴らし、それではこの会見はおしまいだと言った。

「きみはおれとは違う側に属していることを認めな。それならもう話すことはない」

だがわたしはそのことをとても残念に思うと、もうすでに身を翻し、こちらに背を向けて立ち去ろうとしている主に向かって言った。わたしはそれをとても残念に思う、どれほど残念に思っているか、とても言葉にできないが、わたしはできることならば、もし許されるならば、あなたと一緒にいたかったのだ、というの、わたしは心から

あなたのことが好きなのだから。

声の主はわたしをふり返り、心底からの軽蔑を見せて目を細めた。

「許されるならば、ときみは言った。その言葉ですでに、おれとは別の道を行く者のあかしなのだ。おれのもとへ来る者、おれに与する者は、誰の許可も得ず、ほかの誰の思惑も気にかげず、ただおれの意志のみでおれのもとへ来る。きみというやつは、肝心なときに限ってきみ自身の意志を放棄して、自分自身についての決定権を自分以外のものに委ねてしまうのだ…：そしてその権限を誰に委ねているのかさえ、きみはよく知らずにいる。それはおれのもっとも軽蔑する生き方だ。自分にながでできるのかを知ろうともせず、自由とはなにか、行為とはなにか、権利とはなにかも知らぬ者よ、立ち去れ。こう見えておれは忙しいんだ」

そして彼は去ってしまったが、わたしは不思議と落胆しなかった。というの、彼がどこにいてどこに行けば会えるのか、わたしはいまでは知っているらしいのである。彼は相変わらず非常に奥深いところに隠れていて、容易に見つからないのだが、それでもいざというときには、わたしは彼を探し出せるという気がするのである。わたしたちのあいだには、わたしの彼への思慕と、彼のわたしへの軽蔑という、このうえなく相反する以上のものはなにもない。ところが、その彼の軽蔑で

しか慰められない何ものかがわたしのうちにあり、それがわたしを彼のもとへ導くのである。そしてその何ものかは、皮肉なことに、人が生きていくかぎり決して逃れ得ない何ものかなのである。思うに、あの声の主もまた、この事実を知っているのではなからうか。

二〇二四年四月三十日

水澤雪下

<https://nijibms.com/>



ダンテ『神曲』14世紀の装飾写本より、地獄篇第34歌の挿絵 (Add MS 19587, f. 58r)。地獄の底に降り立ったダンテとウェルギリウスは、サタンの姿を見る。